
王子と魔女のマスカレイド

runaway

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王子と魔女のマスカレイド

【Nコード】

N0507Z

【作者名】

runaway

【あらすじ】

好奇心で王宮の舞踏会にもぐり込んだ森の魔女イウレース。ちよっぴり見てみたかっただけなのに、王子にバレて捕まってしまう。 。 まじめで世間知らずな魔女と、陰謀渦巻く王宮で生きる王子の物語。

01・舞踏会

きらめくシャンデリアの明かりの下で、きらびやかに着飾った人々が優雅にダンスを繰り広げている。

生まれて初めて目にする、そして最初で最後であろう王宮の舞踏会。

見たこともない楽器から紡がれる楽の音と、天上人かと思ふ貴婦人たち。

イウレースは忍び込んだ広間の片隅に隠れるようにして、夢のような眺めに目を奪われていた。

こんな世界が、本当にあるんだ……。

いくつかの偶然と出来心が重なって忍び込んでしまったが、それだけの価値はあった。片田舎の小さな村の呪い師である自分に、こんなものを目にする機会が次にあるとは思えない。

あと少し見たらと思いつつ、どうしても去ることができなかった。イウレースは魔法にかけられたようにひたすら光景に見入り続けた。だからぼうつと見惚れていた彼女は、自分に近づいてきた者の存在にまったく気付かなかった。

「一曲いかがですか」

横合いからかかった声で、イウレースは初めて我に返った。振り向いた先には、一人の男性が彼女に手を差し伸べていた。

「……はい？」

やや赤みのかつた金髪にふちどられた際立つた美貌に、湛えられた完璧な微笑がイウレースに向けられていた。一瞬今いる場所も忘れて見惚れてから、鬱金の頭髪にまぎれた額冠が目に入った。

略式ながら間違いない意匠が示すところに気付いたイウレースは、ぎよつとして後退った。

今宵の舞踏会の主催者、この王宮の実質的な主がそこにいた。

「え、いえつ、あの……」

病床の王に代わり、ザルカルト王国を預かる王子は、とっさに断るために上げられた娘の手を取って引き寄せた。微笑みを絶やさぬまま、優雅にその甲に唇を触れてからやわらかに言う。

「そう遠慮せずともよろしかろう。今宵は無礼講。みな一夜の夢を等しく愉しもうではないか」

「あ……」

イウレースは彼に連れられて、広間の中央へ歩み出た。ゆるやかなワルツから始まり、曲のテンポは軽快に速まってゆく。王子は流れるような足さばきでステップを踏んで、ろくにダンスを知らぬ彼女を巧みにリードしていく。

導かれるままに廻る景色を眺めながら、イウレースは夢心地にひたった。

音楽の転調に合わせ、彼が娘の身体を引き寄せた。

互いが入れ替わる刹那、涼やかな声が囁いた。

「ニナンの魔女か」

「！」

はっとイウレースは相手を見た。だが確かめる暇もなく身体が回され、再び引き付けられた耳に声が届く。先ほどまでのやわらかさを失った、冷たい氷のような声音だった。

「うまく誤魔化していたようだが、残念だったな。そうニーナイ香臭くては、せつかくの術が台無しだぞ」

いつそうめまぐるしくなる曲のテンポに乗せられて、見た目の優雅さはそのままにイウレースはくるくると弄ばれた。そして時折訪れる交錯のたびに、嘲りに満ちた囁きのみが流し込まれ続ける。

「お前のような老いぼれ魔女まで駆り出されていたとはな」

「間抜けな奴だ。ほかの奴らが捕まっているのを見ていなかったのか」

「向こうもよほど手詰まりと見える」

「しかしあの婆がよく化けたものだ」

「どうした？ もう息が上がったか。年寄りの冷や水はよくないぞ」

曲が終わった。

イウレースは彼の手を振りほどいて離れ、逃げようとした。だが激しいダンスのあとで思うように動かぬ足がもつれて姿勢を崩す。

倒れそうになった身体を、しなやかな腕が支えた。

彼は目を大きく見開いて肩で息をするイウレースを見下ろして、穏やかに微笑んだ。うわべだけの穏やかさ、見せかけの優しさで心配げに言う。

「おお、疲れてしまったか？ これは悪いことをしたな。誰ぞに案内させるゆえ、少し休んでいるがいい」

王子の合図に従って現れた礼服の衛兵二人が、イウレースを両脇から支えた。身動きの取れない娘を見てもう一度、今度は冷ややかな視線を投げかけてうなずき、彼は背を向けた。

衛兵たちはイウレースを挟んだまま丁重に、だが有無を言わず歩き出す。

イウレースは半ば引きずられるようにして、茫然となりながら広間を出て行った。

02・魔女のまやかし(前書き)

暴力的な描写あり

02・魔女のまやかし

そうして夜も更けたころ、イウレースが閉じ込められた塔の小部屋に王子はやってきた。

もう一人、黒い魔法使いの礼装に身を包んだ男が部屋に入って、扉は閉じた。

先ほどまでとは違って変わって冷ややかな表情で、王子はイウレースを見下ろした。

「いつまでそんなまやかしを纏っている。さつさと本性を現わすがいい」

「あ……」

イウレースはうるたえて、応えることもできずただ彼の美貌を見上げた。

王子は苛立ったように背後に立つ男に目をやった。男はうなずき、片手を上げて指を動かしながら何事か呟く。同時にイウレースの周囲の何かが波立った。

無論それが「何か」は彼女にも判っている。

ヴェールのように纏っていた幻のドレスが剥ぎ取られ、中に隠していた毛織の衣服が露わになった。ごわごわした肌触り通りの見た目を取り戻した、実用重視の地味な現実の服に、一瞬己の状況も忘れて嘆息が漏れる。

一方その姿を見た王子は、苦々しげに舌打ちした。

「よぼよぼの婆のくせに、まだ若さに未練があるか。いや、いい」

やや驚いた様子で再び唱えかけた男を制し、彼はイウレースを見据えた。

「それほど大切なら構わん。ではその綺麗な貌が傷つけられる前に、大人しく答えるのだな。貴様は何の工作を依頼された？」

「え……？」

ぼんやりと聴き返した瞬間、頬に鋭い痛みが弾けた。縛り付けられた椅子ごと倒れたイウレースの亜麻色の前髪をつかんで起こし、王子は凄まじい美貌を寄せて言う。

「とぼけるな。ここ二週間ほど、魔法使いがやたらと王宮に忍び込んでくる。おおかたあちらの手引きのためだろうが、貴様は何をする気にいる？ いやそれよりも、奴らはいつ攻めてくる？ 半年後か、一年後か それとも一月後か。答える」

痛みと驚きに朦朧となりながら、イウレースはただ首を振った。何を言われているのか、まったくわけが判らなかった。

だがそんな娘の様子に、彼の瞳は烈しさを増しただけだった。間を置かず反対の頬が張り飛ばされる。

「おおよその裏は取ってある。ふざけた態度でいると、ただでは済まんぞ」

さらに二度、三度と繰り返された鋭い平手打ちに口の中が切れ、血の味が広がった。

それでもイウレースが応えることができずにいると、彼はいったん諦めて下がった。腕組みして、うんざりしたように頭を振る。

「わざわざ催した宴にかかったのがこんな小物で、しかもてこずら

せるか。

なんの餌に釣られたのかは知らんが、オークインにさほどの義理があるわけでもなかるう？ 何を強情を張ることがある」

「殿下」

その時、後ろの魔術師が声をかけた。

「この者の術が解けませぬ。まやかし破りも解呪も試しましたが、効かぬ様子」

「なに？」

王子は振り返っていぶかしげに問い返した。

「ニナンの魔女は、魔術にそう長けてはおらなんだと記憶していたが」

「はい、長くニナンの村の呪い師を続けた功で三級魔道士の允許を得ましたが、元来は本草術と占い程度の力しかなかったはずでございます。これは……」

魔術師がうなずく。

「ではニナンの魔女ではないというのか？」

確かにニナイ香の香り以外に、あの婆らしい癖は感じなかったが……」

「ですがほかにそれらしい術者の記録もございませぬし……」

「……婆さまは……先週亡くなっただんです……」

弱々しい声に、王子と魔術師は床に転がる相手に目を向けた。

イウレースは痛みに涙を滲ませながら、かすれた声で必死に言っ

た。

「私、婆さまじゃ、ありません……」

王子がつかつかと歩み寄った。

かがんで娘を引き起こし、静かな声で問う。

「ニナンの魔女ではない？」

「はい……」

小さくうなずく娘に貌を寄せてのぞき込み、さらに低い声で囁くように言う。

「お前の名は？」

「イウレース……」

王子はしばし娘の瞳を見据えた。

痛みに霞む視界の中で、イウレースは彼のまなざしが心の奥まで入り込んできたのを感じた。与えられた名を手がかりに、彼女の中から必要な情報が引き出されていく。

朦朧とした頭の片隅でイウレースは理解した。

では彼も、魔道に通じているのだ。

やがて彼は娘を助け起こした。縛めを解き、椅子に座り直させる。表情を変えずに静かに言った。

「嘘ではないようだな」

「はい……」

イウレースはうなずいた。張られた頬が疼き、眩暈がする。だが彼らの用事はまだ済んでいなかった。求められるままに、痛みを堪えながら訥々と語った。

「私……婆さまに拾われて見習いをしていたんです……。でも、引き継ぐ暇もなく突然亡くなられてしまって……。それで今日は、登録を変更してもらいに来ていたんです。

そうしたら、舞踏会があるって聞いて……。どうしても見てみたくなつて……」

ほとんど魔が差したようなものだった。

奥田舎の村からはるばる馬車を取り継いで王都まで来たのは、「ニナン村の魔女」として登録されていた育て親の仕事を引き継ぐ手続きのためだった。

そして役所での何げない世間話で、イウレースは聞いたのだ。

今宵、王宮で大きな舞踏会が開かれる、と。

しかも今日は併せて病床長き王陛下の健康を願って、王宮の大神殿も開放しての一般参詣も行われるということだった。そのため、身なりさえきちんとしていればついでに舞踏会をのぞくこともできるらしい。とも。

村からめつたに出ることもないイウレースは、好奇心をどうしても抑えることができなかった。

それで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0507z/>

王子と魔女のマスカレイド

2011年12月2日20時49分発行